

フランスが考える植民地時代 ～アルジェリアを例に取って～

小沢紗代

イラク戦争の際、ブッシュ政権を批判し、戦争に反対を表明したフランス。しかし、フランスの過去を振り返ってみれば、かつて植民地帝国を築きあげた歴史を持っており、イラク戦争に反対できないようなたくさんの罪も犯してきた。植民地国の中でも、他の国々と少し異なるアルジェリアに焦点を当て、フランスの植民地化がアルジェリアへもたらした功績・問題から見えるアルジェリア植民地化の有効性、そして現代において、両国の人々がこの歴史をどのように考えているのかを考察していく。

1830 年にアルジェ派兵をして、アルジェリアを植民地としたフランスは、132 年間の長い期間に及び、この国を支配した。アルジェリアは、インドシナやその他のアフリカ諸国などの植民地とは違う扱いをされてきた。1848 年には、アルジェリアはフランスの海外県としてその地位を定められるのである。ナポレオン三世のように、アルジェリア人に対し寛容な政策を打ち出した者もいるが、その真意はアルジェリアをフランス本国に同化することにあった。アルジェリアの同化政策は、フランスの利益のために、原住民から全てを奪い、彼らの最も大切な伝統を犠牲にしていくものであった。現地のフランス人、そしてフランス本国に有利な政策でアルジェリアの人権を無視した政策は、続いていく。

フランスの圧政に苦しめられるアルジェリアで大きな動きがあったのは、1954 年のアルジェリア民族解放戦線（FLN）による蜂起であった。ヴェトナムのディエンビエンフーの戦いでヴェトナム軍が勝利し、フランスの撤退が決まったことは、アルジェリア人たちを勇気付けた。これがアルジェリア独立戦争の始まりである。泥沼化していた戦争状態に転機が訪れたのは、1958 年のことであった。ド・ゴール将軍が大統領に返り咲き、彼にアルジェリアの独立は託された。1960 年に世界が大きく動いた。17 のブラックアフリカが次々と独立を果たし、そのうちの 14 カ国はフランスの植民地であった。しかし、これにアルジェリアは含まれなかった。アルジェリアが他の植民地とは違った扱いをされていたことももちろんだが、1956 年にサハラで油田が発見されて、フランスにとってアルジェリアの重要性がより高くなったからである。しかし、エヴィアン協定の締結でようやくアルジェリアは、独立が承認され、1962 年 9 月 25 日、現在の「アルジェリア民主人民共和国」が誕生した。132 年間のフランスの支配が終わりを告げた瞬間であった。

独立したにもかかわらず、アルジェリアの情勢は安定しなかった。独立後、独立戦争時にアルジェリアを先導した FLN が政権を握ることになる。この FLN による一党独裁政治がベン・ベラ政権から 26 年間続いていく。この一党独裁政治は、アルジェリア国内のテロ・内戦を引き起こし、経済的・社会的・政治的に失敗を招いた結果となった。イスラム

過激派などによるテロや内戦で工場などが破壊され、失業者が増加し、人々の生活水準は下がっていった。数十万のアルジェリア人が祖国を離れ、現在も不安定な状況が続いている。

アルジェリア植民地化が、果たしてアルジェリアに対して有効であったかどうかを考えると、行われた政策の中には良い側面もあったことを認めなければならない。たとえば、学校の建設によって教育環境が整えられたことが挙げられる。たとえ、その真意が学校教育によるアルジェリア人の精神征服であり、アラブ語が振興されなかったとしても、結果的にフランス語とアラブ語を普及させている。しかし、実際に教育を受けることができた子どもたちはエリート層に限られており、その真意は彼らを植民地体制に編入することであった。やはりここでも、フランスに有利なように原住民に対する政策がなされていたのである。政治的に見ても、アルジェリア人の自治性は非常に低いものであったし、形式的には平等がうたわれていたとしても、実際はまったくその事実はなかった。結局のところ、植民地化の悪い側面が多いのは否定できない。

被支配国であったアルジェリアは、フランスの植民地主義に対して痛烈な批判をしている。ブーフテリカ大統領が、「アルジェリアに対するジェノサイドである」とまで言った背景には、アルジェリア人のアイデンティティ・歴史など全てのものが奪われた結果、自分たちがいったいアラブ人なのかフランス人なのか分からないでいる現状を鮮明に映し出していることが挙げられる。このジェノサイドという過激すぎる言葉も、アルジェリアの立場を考えれば理解することができる。フランスは、彼らから全てのものを奪い、めっちゃくちゃにして帰っていったのだから。

フランスは「植民地化は正しいものであった」と公式に主張してきた。自分たちが優れていて、その進んだ技術や学問を文明的に遅れた地域にもたらし、劣った人々を文明化する使命があったこと。そして 16 世紀初頭からトルコの支配を受けていたアルジェリアをトルコから解放すること。この二つを掲げて、フランスは植民地化という行為を正当化したのである。

2005 年 2 月 23 日法の第 4 条にも、フランスの植民地化に対する姿勢は色濃く現れている。「教育カリキュラムでは、植民地におけるフランスのポジティブな役割を認める」という法案である。この法案がもたらした両国への波紋は大きく、翌年一月に廃止されたが、ようやく最近になって植民地問題という過去がフランスで論争の対象になることを示した。ここに書かれるポジティブな役割とは、学校教育の改善や、西洋の進んだ医療技術による、当時劣悪であった衛生状況の改善などである。しかし、この法案は、極端な面を誇張しているに過ぎない。逆にネガティブな役割を挙げたらきりがない。アルジェリア独立戦争時における大量虐殺や拷問、第一次・第二次世界大戦での前線への派兵などである。どちらを見ても、アルジェリア人がフランス人より劣る存在であったことが、容易に理解できる。

フランスは、これらの過去の負の遺産と真剣に今後も向き合っていかなければならない。フランスが残した爪痕は深く、現在の両国が抱える問題に結びつくものも少なくない。最近になって、ようやくフランスでも過去を見直す動きが出てきた。パリ市長がアルジェリアへ訪問した際、「植民地化は極めて遺憾な行為であった」と自らの罪を認めている。戦後保障の不十分も議論され始めているし、アルジェリア独立戦争時の大量虐殺や拷問に関する証言も明るみに出てきた。しかし、失われたものは多く、両国の関係を修復するにはまだ多くの時間が必要である。

以上のことから、アルジェリアの植民地化にはやはり、アルジェリアにとっては災難以外の何ものでもないことがわかる。フランスはアルジェリアの中を長期間引っ掻き回し、結果的に植民地に失敗した。残されたものは絶望だけであった。フランスの過去を見直す姿勢もまだ十分であるとは言いがたく、さらなるアプローチが必要だ。フランスは今一度、この問題に真剣に取り組み、考え直していかなければならない。